S.　Ashina

０．オリエンテーション、導入・バルト研究から	4/12
１．自然神学拡張を再考する	4/19
２．キリスト教と政治的なもの	4/26
３．旧約聖書と契約思想	5/10
４．契約思想の射程	5/17
５．王権	5/24
６．ローマ帝国、イエス、パウロ	5/31
７．国教化と古典的政治神学	6/7
８. 近代世界と政教分離	6/14
９．国民国家と立憲主義	6/21
10．社会的なものの拡張	6/28
11．ロールズ	7/5
12. 自由主義と共同体主義	7/12
13．リクール	7/19
（14. 徹底的民主主義	7/26）

＜授業の概要・目的＞

現代世界において宗教は、深刻な対立要因の一つと見なされている。この対立図式自体の問題性は別にしても、キリスト教がこうした文脈で問われていることは否定できない。本講義では、こうしたキリスト教思想を取り巻く思想状況を念頭に置きながら、キリスト教思想の新なる展開の可能性について議論を行いたい。扱われる問題圏は、自然・環境・経済・聖書で構成されるものである。

取り上げられる問題は、自然神学、聖書学から日本キリスト教思想までキリスト教学の全般に及ぶが、2016 年度前期は、自然神学の拡張という試みをキリスト教政治論の諸問題において具体的に展開したい。これは、「キリスト教思想の新しい展開」についての考察の締めくくりとなる。

＜成績評価＞レポートによる。

＜受講の注意事項＞

・受講生には、講義内容を理解するために必要な復習を行うのはもちろんのこととして、各自の研究テーマとの関係づけを行うための発展的な学習が求められる。必要に応じて講義担当教員との研究相談を行うことが望ましい。

・質問は、オフィスアワー（火３・水３）を利用するか、メール（授業にて、指示）で行うこと。

＜導入・バルト研究から＞
書評：福嶋揚著『カール・バルト　破局のなかの希望』ぷねうま舎、2015 年。

本書は、ドイツ語で出版された『死から生命へ――カール・バルトの死生観の研究』（二〇〇九年刊行。「初期バルトを対象とした、小規模の教義学的な研究書」）の続編であり、初期バルトから『教会教義学』などへ分析範囲を広げ、また教義学だけでなく、倫理学的哲学的な思想までを視野に入れたバルトの専門研究書である。序論には「補論」として「バルトの死生観についての先行研究」が含まれており（そのほかにも「補論」は存在する）、また第三部では『教会教義学』の未完部分に位置する「終末論」について立ち入った論述が行われ、さらに、シュヴァイツァー、キュンク、滝沢克己などをバルトとの関連で論じるなど、その視野はきわめて広い。こうした点で、本書は優れた思想研究と言える。

以下においては、まず、本書の概要を確認したうえで、本書各部について論点を限定した説明を行い、それぞれに対するコメントを行うという仕方で、書評を進めることにしたい。そして最後に、本書全体についてコメントする。

・・・

第一部「永生と今生のあいだ」（第一章「時間と永遠」、第二章「聖霊・魂・肉体」、第三章「人間の死とキリストの死」）は、バルト神学の死生観についての基礎論的考察と言うべきものであり、「時間と永遠」の関係がポイントとなる。それに対して、第二部「人間世界の自己破壊を超えて」（第四章「生命への畏敬について――バルトとアルバート・シュヴァイツァー」、第五章「自殺について――バルトと滝沢克己」、第六章「戦争について」、第七章「人生の一回性について」）と第三部「正義・和解・未来」（第八章「倫理の源泉としての義認――バルトとハンス・キュンク」、第九章「生命の光」、第一〇章「希望に基づく闘争――『教会教義学』の未完の終末論」、第一一章「バルトの唯一の終末論講義」）は、死生観の具体的な内容を扱っているが、第二部では、現代世界が陥った「死」の現実がバルト神学においてどのように論じられているのかが問題とされ、第三部では、この死の現実を乗り越える道（希望）をバルトがどのように描いているのかが分析される。なお、このように本書はよく考えられた構成になっているが、書評者がやや違和感を受けたのは、第七章の位置づけであることを、コメントしておきたい。

次に、各部における議論について、論点をしぼって紹介を行い、合わせてコメントを述べてみよう。

まず第一部から。バルト神学の視点から人間の生と死を論じるために、本書は、「時間と永遠」という問題から議論を始める（第一章）。それは、キリスト教神学においては人間の生と死が永遠の命（永生）との関わりで問われることに関連しており、そこから、バルト神学の基本構造（キリストの出来事において啓示された三位一体論）というべきものが明らかになる。まず、バルトにおいても時間は人間の「実存形式」、つまり「人間存在の不可欠の構成要素」（ユンゲル）とされているが、西洋哲学の伝統において、時間とその彼岸にある永遠とが分離され対置される傾向（時間と永遠の対立というバビロン捕囚）が強いのに対して、バルトにおいては、時間と永遠は、相互に分離不可能な関係性に置か

れている。すなわち、「永遠とは、人間存在の根本構造である時間性に対して、不可分、不可同、そして不可逆の関係にありつつ、それを根底において成立せしめるア・プリオリなものである」、「自己を超え出て異郷へと赴き、出会いを創造するような、脱自的な運動性を持つ」（六一頁）。この「不可分、不可同、不可逆」あるいは「運動性」という構造は、本書で扱われるさまざまな問題において反復されており、バルト神学の基本構造と言うべき位置を占めている（たとえば、肉体、魂、霊からなる全体性としての人間については、「『霊』と『魂』の概念の用法は、霊と魂の存在論的な不可逆性および不可同性を端的に言い表している」（七七頁）、など）。

本書のバルト解釈のポイントは、このようなバルト神学における永遠概念が、「聖書の適切な解釈」（五三頁）に基づいた三位一体論的な永遠であり、人間の生と死は、この永遠の関係づけられている、という点に認められる。永遠は静的な超時間性ではなく、神の内なる「不可分、不可同、不可逆」な「運動性」（内在的な三位一体）は、外側に向かって、時間という形式においてなされる運動（経綸的な三位一体）となるのであって、人間の生命は、この運動が生み出す「驚くべき無償の贈与の出来事」にほかならない。創造（神と人との契約という原関係に基づく）は、「単なる不条理な被投性でもなく、所与性、さらに贈与性として、倫理的応答を招き、呼び覚ますに至る」。このように、永遠と時間という問題の射程は、キリスト教的死生観から倫理的問いにまで及ぶのである。

以上が本書におけるバルト神学の基礎論的考察であるが、第一部では、これに続いて、人間論と復活（第二章）、死と逝去に基づく死生観（第三章）が扱われる。

興味深いのは、魂と肉体の二元論に対する、肉体・魂（人間の自律性、尊厳の座）・霊の全体的な統合という聖書的な人間理解が論じられている点である。復活が神話的表象として説明されていることについては、「復活は、死において失われる心身全体の統合性が回復されることの神話的表現」（八〇頁）という以上に議論が深められていないのは残念であるが、重要なことは、全体的統合の喪失として死が論じられることであり、ここから「Tod を『死』、Sterben を『逝去』」（八七頁）と訳し分けるという論点へ、また人間の生の永遠化へと議論が進められるのである。「死」と訳される Tod は、「人間の罪に対する神の審判」「創造神からの人間の自業自得の分離」を意味しているが、「キリストの献身的な身代わりの死を通して、人間は無罪放免され、それによって死の破壊的な力から解放される」（九六頁）。それによって、「死の破壊力」は解消され、死は「神から定められた自然的寿命の終焉」としての自然的逝去（Sterben）になる。このような死と逝去に対して、復活とは神との本来的関わりにおける心身の全体的統合性の回復を意味しており――「健康と病気」の問題にも関わる（一三一頁）――、本質的なことは、死から逃避する試みにあるのではなく、「人間が死んでも、その有限の生命は神の永遠の中に保たれる」（九五頁）こと、つまり、此岸の死すべき生命が神において「栄光化」され「永遠化」されることなのある。

ここで第一部についてのコメントを述べておきたい。「不可分、不可同、不可逆」あるいは「運動性」という構造が本書で反復されていることについてはすでに指摘した通りであるが、これは一方で本書の論述に首尾一貫性を与えている。しかし他方で、それはしばしば議論が図式的あるいは平板的との印象を生じることになっている。これは、本書の問題と言うよりもバルト神学の問題かもしれないが、たとえば、「霊の撤退としての死」「霊の忘却としての死」といった議論（七六―七八頁）は、具体的事態に踏み込んだ叙述を行う

ことによって、図式的という印象を緩和できたのではないだろうか。また、本書では、「逆説」概念が、たとえば、「『死』を通してのみ開かれる『生命』へと向かう逆説的運動」（二二頁）といった仕方で多用されているが、本書におけるその用法には曖昧さが見られる。「逆説的運動」とは、論理的な意味での逆説なのか、レトリカルな意味での逆説なのか、さらにはキリスト論的な逆説なのか、あるいはむしろ弁証法と言うべきか。書評者には、本書における「逆説」のいくつかのものは弁証法と言うべきもののように思われた。

以下は、Ｗｅｂ公開資料では省略。
残りの部分は、『宗教研究』（日本宗教学会）に掲載された際に、お読みください。